

# 「個人的運動者」の実態と特性に関する研究

藤 井 和 彦<sup>1</sup>・石 川 智<sup>2</sup>

## 1. 研究の目的

スポーツ経営学における「運動者行動」は、伝統的に「基本的スポーツ事業」として捉えられてきた3つの運動の「場」が創り出す人とスポーツとのつながりを意味する用語である。すなわち、共に運動を行う仲間という要因によりスポーツへの接近行動を喚起する「クラブ運動者（C 運動者）」、施設開放など施設そのものの持つ魅力や機能により接近行動を喚起する「エリア運動者（A 運動者）」、各種教室やイベントなどスポーツのプログラムにより接近行動を喚起する「プログラム運動者（P 運動者）」という視点がそれである。

これらは、人々の「するスポーツ」に対する接近行動を誘発する直接的な要因であると同時に、スポーツ経営が社会の働きとして整えるべき環境、すなわちスポーツの社会的価値を発揮させ、人々に豊かなスポーツとの関わりをもたらすような環境の整備に関わる概念ともいえる。しかしながら、昨今のスポーツ実施率に関する諸データや、健康や運動に関するブームの現状などをみると、人々の「するスポーツ」への接近行動は必ずしも上述

---

<sup>1</sup> 白鷗大学教育学部

<sup>2</sup> Y M C A 健康福祉専門学校

筆頭著者 e-mail : [fujiika@fc.hakuoh.ac.jp](mailto:fujiika@fc.hakuoh.ac.jp)

の様な、伝統的な「基本的スポーツ事業」がもたらす「場」のみで成立しているとはいえない状況が推測されるのである。

本研究では、こうした「基本的スポーツ事業」に誘発されないスポーツ実施者を「個人的運動者」として位置づけ、その実態や特性を従来の3つの運動者との比較から検討していくことを目的とした。具体的には、「個人的運動者」がどの程度存在しているかを明らかにした上で、運動の実施頻度や運動内容などの実態を確認していく。さらに、この層が運動を行う目的やスポーツ環境への期待を探り、運動者としての特性を明らかにしようとしている。

## 2. 研究の方法

本研究では、まず始めにスポーツ経営学に関する先行研究や、人々のスポーツ実施の実態に関わる調査などをあたり、研究の背景をまとめた。次いで、「個人的運動者」をはじめとした本研究に関わる概念を操作化し、運動者の各層を把握し分析するための調査票を作成した。

本研究のために構成された調査票を用い、調査を実施した。調査対象は関東地方のA県B市に居住する住民であり、住民基本台帳に基づく層化無作為抽出により2,500名を抽出した。郵送法により配付・回収を行い660部の回答を得た（回収率26.4%）。なお、調査時期は平成25年7月16日(日)から8月9日(金)である。なお、表1に調査対象者の年齢・性別構成比を示した。

表1 調査対象者の年齢・性別構成比

	20－30歳代		40－50歳代		60歳代以上		合計	
	%	n	%	n	%	n	%	n
男性	9.0	58	17.2	111	17.8	115	44.0	284
女性	16.6	107	22.5	145	16.9	109	56.0	361
合計	25.6	165	39.7	256	34.7	224	100.0	645

### 3. 研究の背景

#### (1) 先行研究の確認

運動者の分類や運動生活の階層的把握などの研究は、スポーツ経営学の礎を築いた宇土による1960年代の研究にまで遡る。宇土（1961）は、運動生活を階層化しそれぞれの階層間の運動の成立条件や効果の比較を行っている。クラブ運動者の運動欲求の高さやプログラム運動者の自発性の低さなどを指摘していた。

1970年代には、高島（1970）が宇土の階層化理論を職場の運動生活に援用しエリアサービス事業の重要性を指摘した研究や、同じく高島（1973）による、個人の生活全体に着目した運動者行動の新たな視点の抽出を試みた研究などがある。

しかしその後は、スポーツ経営の各実践領域への関心が高まり、地域スポーツクラブにおける運動者行動を分析した研究（山下ら，1982）や、地域の施設開放に着目して住民のニーズに応じた運営の工夫を検討した研究（永田ら，1986）、学校における運動プログラムをめぐる運動者行動を分析した研究（築瀬ら，1988）など、地域や学校など特定の実践領域の中での運動者行動の分析が中心となり、運動者や運動生活の枠組みそのものに関する研究はない。

2000年代に入り、清水（2001）は「スポーツ生活者」の概念を示し、人々の運動ニーズや欲求を充足するための経営体によるサービス生産の論理ではなく、個人のスポーツ生活からみて経営現象を捉えることの必要性を説いた研究はあるものの、やはり個人のスポーツ生活そのものを捉える枠組みについては研究的な発展は未だみられていない。

#### (2) 人々のスポーツ実施の実態

我が国においては、人々のスポーツ実施の実態を経年的に捉えてきた資料としては、内閣府（2001年以前は総理府）が1960年以降実施している「体力・スポーツに関する世論調査」がある。1979年以降は3年に1度程度の

頻度で継続的に調査が実施されている。2013年実施の同調査では、過去1年間に何らかの運動やスポーツを行ったことのあるスポーツ実施者の割合は80.9%に達しており、週1回以上のスポーツ実施率は47.5%、運動やスポーツのクラブやサークルへの参加率は16.2%となっている。

表2には、同調査における「この1年間に行った運動・スポーツの種目」に関する回答結果を示した（複数回答、n=1,897）。最も回答率の高かった「ウォーキング」（50.8%）に続き、「体操」（30.8%）、「ボウリング」（12.7%）、「ランニング」（12.7%）、「水泳」（9.4%）、「ゴルフ」（9.3%）までの上位6項目は、いずれも個人や少人数で行う活動になっており、一般的に「スポーツ」と聞いて連想するような各種スポーツ種目の割合はいずれも数パーセント程度と、上位項目と比べてかなり低い実施率になってくることが解る。また上位6項目は、必ずしもスポーツ施設を必要としない活動か、利用料金を支払って専用の施設を使って行う活動のどちらかである。

運動やスポーツを行った場所に関する実態を示す資料としては、民間の笹川スポーツ財団（SSF）が継続的に調査を実施し公表している「スポーツライフ・データ」がある。

表3には、「スポーツライフ・データ2012」における運動やスポーツを行った場所に関する調査結果から、施設タイプごとに回答割合が10%を超えるものを、超えるものがない場合には上位3項目を抜粋して示した。最も回答率の高かった場所は「道路」（48.7%）であり、次いで「自宅（庭・室内等）」（21.1%）、「公園」（20.2%）、「海・海岸」（11.2%）、「公共の体育館」（10.9%）、「高原・山」（9.6%）と続いている。

これらのデータは、実施の頻度は問題にはされていないが、表2に示した種目の上位6項目の中では「ボウリング」を除き実施頻度も高いものが上位に位置づいていることは容易に推測できる。表3に示した場所についても「海・海岸」、「高原・山」を除けば、やはり実施頻度が高いことは想像に難くない。

表2 この1年間に行った運動・スポーツの種目

内 容	%
ウォーキング（歩け歩け運動、散歩などを含む）	50.8
体操（ラジオ体操、職場体操、美容体操、エアロビクス、縄跳びを含む）	30.8
ボウリング	12.7
ランニング（ジョギング）	12.7
水泳	9.4
ゴルフ	9.3
テニス、ソフトテニス、バドミントン、卓球（車いすテニスを含む）	9.3
室内運動器具を使ってする運動	8.8
キャッチボール、ドッチボール	8.0
登山（クライミングを含む）	6.5
サイクリング、モーター（サイクル）スポーツ	6.4
スキー、スノーボード	5.9
ハイキング、ワンダーフォーゲル、オリエンテーリング	5.4
野球、ソフトボール	5.3
バレーボール、バスケットボール（シットティングバレーボール、車いすバスケットボールを含む）	5.2
サッカー、フットサル（ブラインドサッカーを含む）	4.9
ニュースポーツ（ゲートボール、グラウンドゴルフ、インディアカなどを含む）	4.5
キャンプ、オートキャンプ	4.3
ダンス（フォークダンス、ジャズダンス、社交ダンス、民謡踊り、車いすダンスを含む）	4.0
ボート、ヨット、ボードセーリング、スキndaイビング、スクーバダイビング、カヌー、水上バイク、サーフィン、釣り	3.6

出典：内閣府、体力・スポーツに関する世論調査

表3 過去1年間に運動やスポーツを行った場所

施設タイプ	施設種類	回答割合%
公共スペース	道路	48.7
	公園	20.2
	海・海岸	11.2
	高原・山	9.6
	河川敷	5.9
公共スポーツ施設	体育館	10.9
	グラウンド	4.3
	屋内プール	3.3
民間スポーツ施設	ボウリング場	9.3
	ゴルフ場（コース）	7.7
	ゴルフ場（練習場）	6.6
小・中・高の学校施設	体育館	4.3
	グラウンド	3.4
	野球・ソフトボール場	0.5
自宅	自宅（庭・室内等）	21.1

出典：SSF スポーツライフ・データ 2012

注）複数回答：n = 2,000、各タイプごとに回答割合が10%を超えるものまたは上位3項目を抜粋。ただし自宅に関してはもともと1項目しかない。

こうしたデータから人々のスポーツ実施の実態として、クラブやプログラムに参加するのでもなく、また運動の際にスポーツ施設すら使わないという運動者、つまり「クラブ運動者」でも「プログラム運動者」でも「エリア運動者」でもない、「個人的運動者」の存在が確認できる。さらに、その層は一定の割合存在していることが推測され、内容や場所という視点からみる生涯スポーツの実施実態としてはかなり典型的で一般的なスタイルであると言える。

## 4. 概念の操作化

以上のような先行研究の確認や人々のスポーツ実施の実態を踏まえ、本研究における「個人的運動者」を捉えるための概念の操作化を行った。「クラブ運動者」、「エリア運動者」、「プログラム運動者」という従来からの3つの基本的なスポーツ事業による運動者の把握もあわせて行うために、次の【資料】に示すようなワーディングで質問を設定した。

なお、「プログラム運動者」については、教室やレッスンなど長期に渡る運動者行動が期待できる「ロングプログラム」と、大会やイベントなど単発的な運動の機会である「ショートプログラム」とを区別した。また、運動やスポーツを行った場所において回答率の高かった「海・海岸」や「高原・山」に対応させる形で、運動やスポーツを行うために遠方に出かけていく運動者を「広域的運動者」として設定した。

こうした各々の形態に関して、実施の有無や頻度を問い、それらを元に運動者としての階層化を図ることとした。

### 【資料】 6つの運動者概念の操作化

#### ①クラブ運動者（Club）

あなたは現在、運動やスポーツのクラブやサークル（地域クラブや学校運動部等）に参加されていますか？

#### ②エリア運動者（Area）

あなたは公共や民間のスポーツ施設（体育館やグラウンド、ジムやプールなど）の個人開放やフリー利用で、個人または仲間と運動やスポーツを行うことがありますか？

※ただし、クラブやサークル等で利用する場合はここには含みません。

#### ③ロングプログラム運動者（Program（Long））

あなたは、教室やレッスン等で指導者の方に運動やスポーツを習うことがありますか？

#### ④ショートプログラム運動者 (Program (Short))

あなたは、市民マラソンのようなスポーツに関わる大会やイベントに個人や仲間と参加したり、地域のスポーツ行事（運動会等）に参加したりすることがありますか？

※ただし、クラブやサークル等で参加する場合はここには含みません。

#### ⑤個人的運動者

あなたは現在、ご自宅（屋内・屋外）や近隣の道路・公園などを使って、意識的に体を動かしたり軽い運動をしたりすることがありますか？

#### ⑥広域的運動者

あなたは登山やハイキング、自転車のツーリングなどのように、運動をするために遠方に出かけていくことがありますか？

※ただし、大会やイベントなどに参加する場合はここには含みません。

この他、各運動者の特性を把握する変数として、週あたりの実施日数、行っている運動やスポーツの内容（頻度の高いものから順に3つまで）、運動やスポーツを行う目的、望むスポーツ環境等に関する質問を設定している。

## 5. 調査の結果

### (1) 運動者行動による分類

まず、前述の6つの運動者のタイプがどの程度存在しているのか、その構成比を確認した。表4にはその結果を示している。「全ての実施率」の列には、実施頻度を問わない（「形式的運動者」も含む）割合を示した。各運動の場合ごとの実施率の状況を示した。個人が複数の運動者行動を成立させている場合もあるので合計は100%を超えるが、「個人的運動者」の構成比が最も高く51.5%に達していた。次いで「エリア運動者」（19.4%）、「広域的運動者」（17.6%）、「クラブ運動者」（13.0%）という順になっている。

また、「うち週単位の実施率」の列には、実施頻度が「週1回以上」の



表 4 各運動の場ごとの実施率の状況

	全ての実施率		うち週単位の実施率	
	%	n	%	n
個人的運動者	51.5	336	<b>45.1</b>	<b>294</b>
広域的運動者	17.6	115	—	—
Club	13.0	85	<b>9.5</b>	<b>62</b>
Area	19.4	127	<b>12.2</b>	<b>80</b>
Program (Long)	12.0	79	<b>8.4</b>	<b>55</b>
Program (Short)	9.6	63	—	—

場合を「実質的運動者」と捉え、その割合を示した。「広域的運動者」及び「ショートプログラム運動者」については週単位での運動を実施しているケースは特異であると思われるため、ここでは集計していない。結果、「個人的運動者」(45.1%)、「エリア運動者」(12.2%)、「クラブ運動者」(9.5%)、「ロングプログラム運動者」(8.4%)の順に高い構成比を示した。特に、「個人的運動者」の実質性は高いことがうかがえる結果である。

## (2) 運動者行動の類型化と階層化による把握

前述の分類では、個人の複数の運動の場に対する接近行動を含んだ捉え方であった。運動者行動を更に詳細にパターン化して捉えるため、ここでは週単位の実施率に基づき、従来からスポーツ経営学で用いられてきたクラブ(C)、エリア(A)、プログラム(P)への接近逃避の組み合わせから導かれる8類型をまとめた。その結果が表5の左列の数値である。分析の対象となった649名のうちC・A・Pいずれかの場、或いは複数の場に接近行動を取っていたのは124名(全体の19.1%)であり、この層が「S類型」を除く7つの類型に分布している。最も構成比が高かったのは、エリアサービスだけに接近している「A類型」で全体の4.9%である。次いでクラブサービスのみに接近している「C類型」が3.2%、エリアとクラブの両方に接近行動を取る「CA類型」が2.8%となっている。これら124名を除いた残りの525名(全体の80.9%)が、C・A・Pいずれに対しても逃避行動を取っていると

表5 週単位の実施率に基づく8類型と、階層によるグループ化の状況

	%	Sを 除いた%	n		%	n
CAP	1.8	9.7	12	C階層	9.6	62
CA	2.8	14.5	18			
CP	1.7	8.9	11			
C	3.2	16.9	21			
AP	2.6	13.7	17	A・P階層	9.6	62
A	4.9	25.8	32			
P	2.0	10.5	13			
S	80.9	—	525	個人的運動者	29.6	192
合計	100.0		649	S階層	51.2	333
				合計	100.0	649

注) 個人的運動者 n=294のうち102名はC・A・Pのいずれかにも接近行動を取っているため、C階層またはA・P階層で計上している。したがって表5における個人的運動者はn=192となり、これらはC・A・Pからは逃避している層になる。

いう意味での「S (Stay) 類型」であり、この中に「個人的運動者」が含まれている。

表5の右列には、類型化の結果を基に階層化を図り、その中に「個人的運動者」を位置づけたものの構成比を示した。スポーツ経営学では、「継続性」、「合理性」、「組織性」、「自律性」といったスポーツとの関わりの豊かさの条件を最も満たす運動の場は、クラブであるとされてきた。したがって8類型の中でCとの関わりを持つ4つの類型(CAP、CA、CP、C)を「C階層」とした(構成比は9.6%)。次にクラブとは関わりを持たないが、エリアやプログラムと関係する3つの類型(AP、A、P)を「A・P階層」とした(構成比は9.6%)。本来は「A階層」と「P階層」は区別すべきところであるが、構成比が低いため今回は同一のグループとしてカテゴライズした。「C階層」と「A・P階層」を除いた残りの約80%の中に、「個人的運動者」と「S階層」が含まれることになる。全ての個人的運動者294名のうち102名はC・A・Pいずれかの場にも接近行動を取っていることが確認できるため、この分を差し引いた192名が、「個人的運動のみを行っている個人的運動者」として抽出され、その割合は全体の29.6%ということが

確認できた。残りの51.2%が週単位では全く運動やスポーツを行っていない「S階層」であり、この値は国の調査結果などと比較しても妥当なものである。

### (3) 階層別にみるスポーツ実施日数

こうして抽出されたスポーツ実施群3層のより詳細な実態を確認するため、週あたりの実施日数をまとめたものが表6である。「C階層」では最頻値は「2日くらい」(30.0%)にあり、累計すると全体の60%が週3日以下の活動日数となっている。一方、「A・P階層」では最頻値は「3日くらい」(36.7%)にあるが、累計すると全体の70%以上が週3日以下の活動日数である。これに対して、「個人的運動者」の層では、やはり最頻値は「2日くらい」(19.3%)にあるものの、各日数に比較的均等に分散しており、週3日以下でちょうど50%、週6日以上も25%を占めるなど、明らかに前述の2層とは構成比が異なる。週あたりの実施日数の平均値は「C階層」が3.38日/週、「A・P階層」が3.13日/週に対して「個人的運動者」が3.81日/週と他の階層と比較して顕著に高く(「全体合計」では3.58日/週)、高頻度で運動者行動を生起させている「個人的運動者」の実態が明らかになった。

表6 実施3層の週あたりの実施日数(週1日以上)

	C階層		A・P階層		個人的運動者		全体合計	
	%	n	%	n	%	n	%	n
毎日	11.7	7	6.7	4	14.2	25	12.2	36
6日くらい	1.7	1	3.3	2	10.8	19	7.4	22
5日くらい	13.3	8	10.0	6	14.2	25	13.2	39
4日くらい	13.3	8	6.7	4	10.8	19	10.5	31
3日くらい	18.3	11	36.7	22	16.5	29	20.9	62
2日くらい	30.0	18	23.3	14	19.3	34	22.3	66
1日くらい	11.7	7	13.3	8	14.2	25	13.5	40
合計	100.0	60	100.0	60	100.0	176	100.0	296

$\chi^2=22.2$  df=12  $p<.05$

#### (4) 階層別にみるスポーツ実施の内容や種目名

次に、行っている運動やスポーツの内容や種目名から各層の実態を捉えようとした。その結果をまとめたものが表7である。現在行っている運動やスポーツの内容や種目名について、行うことの多いものから順に3つまで回答を求めた。表7からも明らかなように、「C階層」や「A・P階層」は「個人的運動者」と比較して、より多様な内容や種目名をあげており、一人あたりの回答数も多い。

「C階層」では、一般的に「スポーツ種目」と聞いてイメージするような、競技的な要素も含んだ各種目名があげられている。一方「A・P階層」で上位に位置づく内容からは、民間のフィットネスクラブ等での施設利用やプログラム参加の様子がうかがえる。

これに対して「個人的運動者」の内容は多様性が極めて乏しい。あげられた9つの内容や種目の中で、比較的实施頻度が低いと推測される「ゴルフ」や「サイクリング」、「登山（ハイキング）」を除くと、ほとんどは軽運動やトレーニング的な運動である。スポーツそのものを楽しむというにはほど遠い現状が推察される結果であった。

表7 各層別にみる、現在行っている運動・スポーツの内容や種目名

C階層			A・P階層			個人的運動者		
内容や種目	%		内容や種目	%		内容や種目	%	
ウォーキング (散歩)	19.7		ウォーキング (散歩)	32.8		ウォーキング (散歩)	56.4	
体操 (軽い体操・ラジオ体操など)	16.1		筋力トレーニング	29.3		体操 (軽い体操・ラジオ体操など)	23.1	
ソフトボール	12.5		ゴルフ	20.7		ジョギング・ランニング	13.5	
バドミントン	10.7		ヨガ、ピラティス	24.1		ゴルフ	10.9	
ゴルフ	8.9		水泳	19.0		筋力トレーニング	10.3	
水泳	8.9		体操 (軽い体操・ラジオ体操など)	13.8		サイクリング	9.6	
登山 (ハイキング)	8.9		エアロビックダンス	12.1		登山 (ハイキング)	6.4	
筋力トレーニング	7.1		ジョギング・ランニング	10.3		水泳	4.5	
テニス (硬式テニス)	7.1		登山 (ハイキング)	5.2		ヨガ、ピラティス	3.2	
バレーボール	7.1		ロードレース (駅伝・マラソンなど)	5.2		注) 156人から248の解答 (M.T.=159.0%)		
ダンス	7.1		ダンス	5.2				
エアロビックダンス	5.4		アクアエクササイズ (水中歩行・運動など)	3.4		注) 58人から116の解答 (M.T.=200.0%)		
サイクリング	5.4		太極拳	3.4				
ジョギング・ランニング	5.4		バドミントン	3.4		注) 56人から105の解答 (M.T.=187.5%)		
スキー	5.4							
ソフトバレー	5.4							
卓球	5.4							
野球	5.4							
グラウンドゴルフ	3.6							
サッカー	3.6							
ヨガ、ピラティス	5.4							
ターゲットバードゴルフ	3.6							

#### (5) 階層別にみる運動やスポーツの実施目的

次に、現在運動やスポーツを行っている理由に関して、各層の比較を行い、「個人的運動者」の特性を明らかにしようと試みた。その結果を示したものが表8である。設定された運動やスポーツの実施目的に関する9の質問項目に関して、各々「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4段階間隔尺度を用いて回答を求め、そのまま得点化した。表中にはその平均得点を各階層別に示しているが、得点は4点満点で、得点が高い程「あてはまる」傾向が強いことを意味している。

一元配置分散分析を施した結果、9項目中5つの項目において統計的な有意差が認められたが、その全てが「C階層」、「A・P階層」、「個人的運動者」の順に高い得点を示していた。その内容は、「スポーツ自体が好き」や、「仲間との交流を楽しみたい」などスポーツを行うこと自体を目的的に捉えていたり、スポーツのもたらす社会的な便益を期待したりするものである。また、得点自体はそれほど高くないが「技術を高めたり試合に勝ったりしたい」や「大会やイベントに参加・出場したい」などスポーツの競技的な側面に関する目的も「C階層」で最も高くなっている。

一方、「個人的運動者」は「気分転換やストレス解消」、「ダイエット」など、手段的な内容では他の2階層に近似した値を示しており、これらの項目では、各階層間の差異は認められない。

表 8 実施3層の実施目的

	C階層			A・P階層			個人的運動者			全体合計			F 値
	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	
1. 健康を維持したいから	3.59	0.62	58	3.73	0.52	59	3.59	0.62	164	3.62	0.60	281	1.26
2. 体力を向上させたいから	3.20	0.72	56	3.46	0.73	59	3.23	0.82	162	3.27	0.79	277	2.17
3. 運動・スポーツ自体が好きで、やりたいから	3.32	0.69	57	3.02	0.93	58	2.43	0.94	156	2.74	0.96	271	24.32 ***
4. 仲間との交流を楽しみたいから	3.21	0.73	56	2.29	0.95	59	2.00	1.01	159	2.31	1.05	274	34.28 ***
5. 気分転換やストレスを解消したいから	3.29	0.83	56	3.17	0.84	58	2.80	0.95	162	2.97	0.92	276	7.90 ***
6. ダイエットをしているから	2.40	0.98	57	2.46	1.07	59	2.54	1.12	155	2.49	1.08	271	0.39
7. 治療やリハビリとして医者に勧められているから	1.71	0.95	56	1.63	0.98	59	1.67	1.03	158	1.67	1.00	273	0.11
8. 技術を高めたり試合に勝つたりしたいと思うから	2.40	1.07	57	1.73	1.01	59	1.41	0.79	158	1.69	0.98	274	25.29 ***
9. 大会やイベントなどに参加・出場したいから	2.23	1.12	53	1.46	0.83	56	1.32	0.72	149	1.54	0.91	258	22.96 ***

\*\*\*p&lt;.001

注) 表中の数値は、「非常にあてはまる」(4点)から「全くあてはまらない」(1点)までの4段階尺度を用いて質問し、そのまま得点化した平均値得点。得点が高いほど行おう目的として「あてはまる」傾向が強いことを意味している。

表9 各層の望むスポーツ環境

	C階層			A・P階層			個人的運動者			S階層			全体合計			F値
	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	
1. 運動する場所や施設が自宅の近所にあること	3.61	0.56	57	3.56	0.72	61	3.32	0.90	297	3.36	0.86	180	3.38	0.85	595	2.98 *
2. 多少遠くても、利用手続きが簡単な施設があること	2.74	0.92	57	2.64	0.87	59	2.56	0.98	294	2.59	0.99	177	2.60	0.96	587	0.56
3. 多少遠くても、無料で利用できる施設があること	3.00	0.93	57	3.10	0.94	59	2.85	1.02	296	3.00	1.03	180	2.94	1.01	592	1.55
4. 有料でも、設備の整った施設があること	2.70	0.91	57	2.89	0.95	61	2.36	0.93	293	2.21	0.99	173	2.40	0.97	584	9.71 ***
5. 長期間じっくりと運動できるスポーツ教室があること	2.84	1.01	57	3.10	0.88	60	2.45	0.91	293	2.53	1.05	173	2.58	0.98	583	9.10 ***
6. 単発的でも様々な運動ができるイベントが豊富なこと	2.68	0.95	57	2.68	0.82	59	2.45	0.94	295	2.38	0.97	172	2.48	0.94	583	2.52
7. 体力や技術を高められる本格的なプログラムがあること	2.42	0.94	57	2.55	0.83	60	2.30	0.92	294	2.30	0.96	175	2.34	0.93	586	1.45
8. 健康づくりや交流を楽しむためのプログラムがあること	3.03	0.84	58	2.98	0.79	61	2.74	0.94	292	2.76	1.00	177	2.80	0.94	588	2.60
9. 各々の関心で選べる多様なクラブやサークルがあること	3.11	0.75	57	2.68	0.85	60	2.62	0.95	293	2.55	0.99	174	2.65	0.95	584	5.27 **
10. 老若男女が集うコミュニティスポーツクラブがあること	2.79	0.98	57	2.55	0.91	60	2.45	0.92	293	2.44	0.98	173	2.49	0.95	583	2.33
11. スポーツ以外の活動も行える総合的なクラブがあること	2.42	0.98	57	2.60	0.83	60	2.44	0.96	292	2.43	0.97	175	2.45	0.95	584	0.55
12. 大会での勝利を目指す競技的なクラブがあること	2.11	0.96	57	1.78	0.72	60	1.71	0.78	292	1.66	0.80	173	1.74	0.81	582	4.67 **
13. 必要な時に技術指導を行う指導者を頼めること	2.68	0.99	56	2.55	0.93	60	2.28	0.96	295	2.25	0.98	174	2.34	0.97	585	4.08 **
14. 交流を楽しむプログラムの指導者を頼めること	2.58	0.91	57	2.32	0.93	60	2.28	0.92	294	2.10	0.96	174	2.26	0.94	585	4.01 **
15. スポーツ用具等の貸し出しのしくみが充実していること	2.88	0.97	57	2.83	1.04	60	2.73	0.95	293	2.59	1.06	175	2.72	1.00	585	1.69
16. 地域スポーツに関する情報提供が充実していること	3.00	0.87	56	2.98	0.78	59	2.69	0.95	284	2.63	1.02	169	2.73	0.96	568	3.67 *

\*p&lt;0.05 \*\*p&lt;0.01 \*\*\*p&lt;0.001

注) 表中の数値は、「非常に期待する」(4点) から「全く期待しない」(1点) までの4段階尺度を用いて質問し、そのまま得点化した平均値得点。  
得点が高いほど地域スポーツの環境として「期待する」傾向が強いことを意味している。



## (6) 階層別にみる望むスポーツ環境

最後に、各階層の別に望むスポーツ環境の違いを比較し、「個人的運動者」の特性を確認しようとした。その結果を示したものが表9である。設定されたスポーツ環境に関する16の質問項目に関して、各々「非常に期待する」から「全く期待しない」までの4段階間隔尺度を用いて回答を求め、そのまま得点化した。表中にはその平均得点を各階層別に示しているが、得点は4点満点で、得点が高い程「期待する」傾向が強いことを意味している。

一元配置分散分析の結果、8項目において統計的な有意差が認められているが、ここでも総じて「C階層」において、スポーツ環境に対する期待が高いという結果が示された。クラブ・サークルや指導者に関わる項目では当然のことながら「C階層」の期待が高くなっている。また、施設に関する項目やプログラムに関する項目では「A・P階層」も「C階層」同様かそれを上回る得点を示しているが、これらの結果は概ね予想できるものであった。

一方、「個人的運動者」の平均得点は全体的に高くなく、現在週単位では全く運動やスポーツを行っていない「S階層」に極めて近似しているか、項目によってはそれを下回る結果であった。「個人的運動者」は自らの力でスポーツ環境を整えており、行政や民間をはじめとした他者の整備するスポーツ環境への依存は低いという結果が確認された。

## 6. 調査結果の考察

本研究における調査の結果、以下のような点が明らかになった。

- ①自宅（屋内・屋外）や近隣の道路・公園などを使って、意識的に体を動かしたり軽い運動をしたりする「個人的運動者」は、週単位の実施者で45.1%、さらに「クラブ運動者」や「エリア運動者」や「プログラム運動者」と重複しない単独の実施者で29.6%存在していた。
- ②「個人的運動者」の週あたりの運動実施日数は「クラブ運動者」や「エ

リア運動者」や「プログラム運動者」に比べて多く、3.8日に達する。

- ③「個人的運動者」の活動内容では、「ウォーキング」、「体操」、「ランニング」において、他の運動者層に比べて実施割合が高くなっていた。
- ④「個人的運動者」の運動実施理由では、目的的な理由は少なく、また社会的なベネフィットに関する理由も少ない。健康の維持や身体の不具合に対する対応が多かった。
- ⑤「個人的運動者」のスポーツ環境に対する意識は、「クラブ運動者」や「エリア運動者」や「プログラム運動者」に類似しているのではなく、むしろ「未実施者」に近い。スポーツ実践はしているが、スポーツの社会的ベネフィットに対する期待は低いのが特徴である。

## 7. 結論

本研究の結果、予め推測されていたように運動実施者の中で「個人的運動者」の占める構成比は高いことが確認された。これらの層はスポーツ実施率の向上に貢献してはいるが、その接近行動の成立は不安定である。人々の「スポーツ行動の成立、維持、発展」というスポーツ経営の目的との関係からは、「未実施者」の接近行動を発現させることと同等に、「個人的運動者」の接近行動を強化させることが重要であると考えられる。

本研究では分析に至っていないが、「個人的運動者」の中にも組織的な活動を期待している層が存在していることが予想される。これらの層に対するアプローチは具体的な対応策の一つとなろう。その際、組織的なスポーツ活動や、活動のもたらす社会的ベネフィットを期待していない「個人的運動者」が、「運動をするためにそこに集まる仕組み」を考えていくことが必要だ。

スポーツ施設すら使用しない運動者を、いかに施設に誘うことができるのか。換言すれば、「個人的運動者」の運動実施を、「個人的」要因からいかにして脱却させ、スポーツ経営の働きとしてこの層の接近行動を維持、発展させていくことができるか。「個人的運動者」そのもののさらなる分類

と、従来の3つの運動者モデルとあわせた体系的な位置づけが必要であると考える。

※本稿は、日本体育学会第64回大会体育経営管理専門領域一般研究発表  
演題番号「経28-014」の内容を再編集してまとめたものである。

### 引用文献・資料

- 1) 永田 靖章・市野 聖治・川合 勇治・岡部 育世・森 奈緒美, 地域における運動施設開放の整備・運営に関する基礎的研究——住民の運動者行動を手がかりとして, 愛知教育大学研究報告 芸術・保健体育・家政・技術科学(35), 1986, pp.45-58.
- 2) 内閣府, 体力・スポーツに関する世論調査, 2013.
- 3) 笹川スポーツ財団, スポーツライフ・データ2012——スポーツライフに関する調査報告書, 2011.
- 4) 清水 紀宏, スポーツ生活とスポーツ経営体に関する基礎的考察: スポーツ生活経営論序説, 体育・スポーツ経営学研究16(1), 2001, pp.13-27.
- 5) 高島 稔, 職場における運動生活の分析, 東京女子体育大学紀要 5, 1970, pp.40-50.
- 6) 高島 稔, 運動生活の構造化に関する研究, 東京女子体育大学紀要 8, 1973, pp.9-22.
- 7) 宇土 正彦, 運動生活の階層に関する体育管理学的研究, 東京教育大学体育学部紀要 1, 1961, pp.54-73.
- 8) 山下 秋二・多田 信彦, 影響交換の様相からみた運動者行動分析の試み: 地域スポーツクラブの場合, 福井医科大学一般教育紀要 2, 1982, pp.61-75.
- 9) 築瀬 歩・市野 聖治・永田 靖章, 学校体育経営におけるプログラムサービスの有効性に関する研究: 総合運動プログラムをめぐる運動者行動の分析, 体育・スポーツ経営学研究 5 (1), 1988, pp.19-29.